

5 上自在地域の景観

①上自在地域の概要

1 自治区の成立（※1～2は『緒方町誌 区誌編』を参考にした）

江戸期	岡藩領上自在組上自在村。
明治 22 年 (1889)	町村制実施により、緒方村大字上自在となる。
昭和 25 年 (1950)	町制施行により、緒方町大字上自在となる。
平成 17 年 (2005)	町村合併により、豊後大野市緒方町上自在となる。

2 主な出来事

永久 3 年 (1115)	僧定与が父母孝養のため、経筒を埋納する（現三宮八幡社付近）。
治承 2 年 (1178)	三宮八幡社建立（伝承）。
天授 3 年 (1377)	三反畑に板碑が建立される。
寛文元年 (1661)	緒方上井手開鑿開始。
寛文 11 年 (1671)	緒方下井手が下流の野尻まで通水。
宝暦 8 年 (1758)	三宮八幡社で、永久三年銘の経筒が発掘される。
天保 8 年 (1837)	岡藩主中川久教が上自在村で田植見物（御覧田植）。
安政 4 年 (1857)	岡藩主中川久昭が上自在村で田植見物（御覧田植）。
慶応 3 年 (1867)	上自在村に石灯籠を建立。
明治 26 年 (1893)	上自在村字城の緒方惟栄館跡に緒方神社建立。
大正 3 年 (1914)	富士緒井路三宮線通水。
昭和 35 年 (1960)	上自在公民館竣工。
昭和 49 年 (1974)	県営圃場整備着手、翌年完工。
平成 11 年 (1999)	三宮八幡社参道入口前に、圃場を見渡せるポケットパーク竣工。

3 上自在地域の構成・人口など

組合名	一番組、二番組、三番組、四番組
戸数・人口	59 戸、134 人（令和元年 12 月）

②上自在地域の立地と環境

上自在地域は緒方川の左岸にあり、段丘面最上部と丘陵境に緒方上井路が流れ、その横には市道緒方中央線が並行している。民家の大部分は緒方上井路・市道緒方中央線沿いにあり、細長く列をなしている（写真 31）。寛文年間に始まった緒方上井路の開鑿により、緒方下井路と丘陵地帯の間の段丘が水田化された。それに伴い集落が丘陵側に移動し、現在の井路沿いに集落が並ぶ独特の景観ができあがった（第 3 章 第 4 節参照）。

市道緒方中央線から南側を見ると、前面には水田が広がり、その中を緒方下井路が西から東へと流れている。緒方川対岸には小野・野仲の集落と丘陵地帯が広がり、さらにその遠方には祖母・傾山系の山々が連なっている。集落の北側には丘陵が控えており、その尾根沿いには富士緒井路三宮線が引かれ、上自在地域の棚田を形成している。またこの尾根上には墓所が数多く営まれている。古い時代から、耕作地を活かすために墓所が高台に営まれたのであろう。

上自在には黒土甲川という小河川が流れているが、この川の水は緒方上井路（黒土甲川架樋）の下をくぐり、緒方下井路に合流している。富士緒井路の水は、末流が緒方上井路や軸丸川に流れ込み、軸丸川の水は緒方上井路の下をくぐり深町水門のある場所で緒方下井路に合流している。牧原・上年野・辻で見てきた井路と同じように、ここでも水を無駄に排水しない仕組みがある。

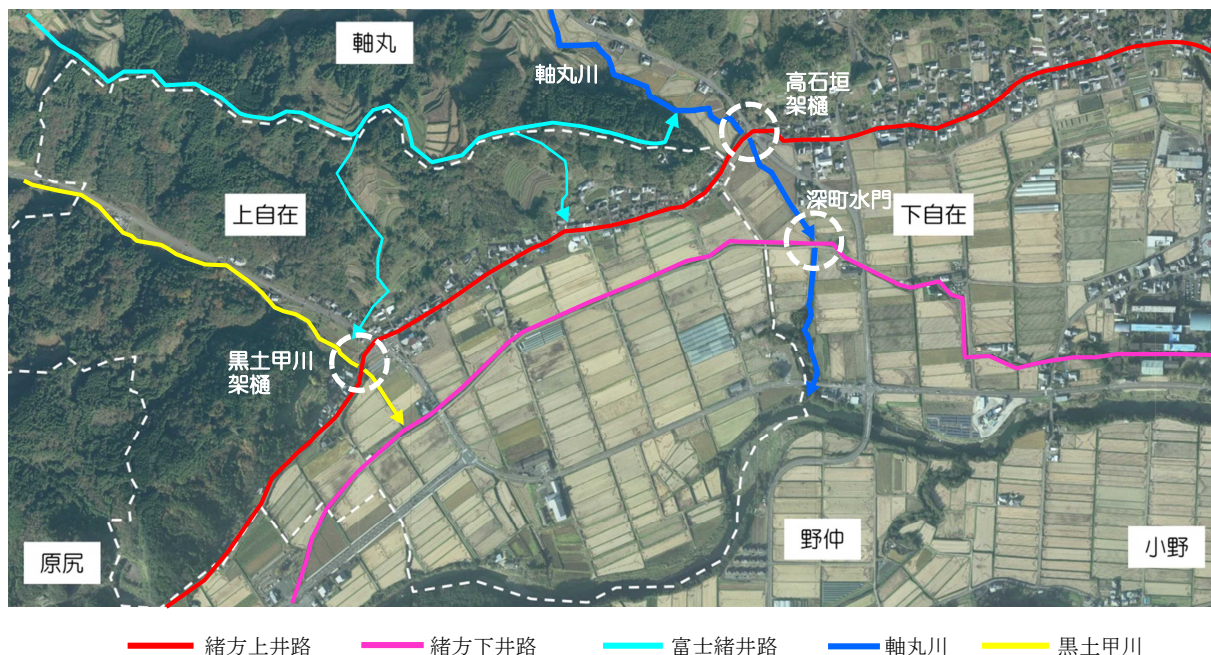


写真 31 上自在地域の位置と周辺地域

③上自在地域を潤す井路と圃場

緒方川によって形成された段丘面を潤すのは、緒方上井路と緒方下井路、上自在集落の後背地にある棚田を潤すのは富士緒井路で、上自在地域は3本の井路により灌漑されている。上自在地域の圃場は、昭和49年に農業基盤整備が実施され、1,046枚の圃場は189枚となった。平安末期に形成されたとされる条里型地割の痕跡は何もない。図39は、緒方上井路と緒方下井路がどのように圃場を潤しているのかを調査し、各井路が灌漑する水田を色分けしたものである。



写真 32 緒方下井路を渡る上井路の水

水田への水廻りは、水張りの時期を逃すと、草が伸びたり水口を閉じたりするので、井路から水田へどのように水が廻っているのか非常にわかりにくい。そのため、田植直前の水張りの時期に、圃場をくまなく回って調査を行った。黄色い着色（圃場A）は、緒方上井路と下井路に挟まれた圃場で、緒方上井路により灌漑される場所である。圃場Bは、緒方上井路の水が複数の箇所、下井路の上を渡



写真 33 緒方下井路内の堰

る小井路により灌漑される場所である（写真 32）。緒方下井路の水面が圃場面よりも低いため、上自在地域の大部分が緒方上井路によって潤されていることがわかる。緑色の着色（圃場C）は、緒方下井路によって灌漑される圃場である。緒方下井路の上流域に、下井路で灌漑される場所があることは意外であった。緒方下井路は原尻の滝上から取水されるが、井路が深い（水面が低い）ために、下井路上流域で圃場へ導水するのは難しいのである。圃場Cを潤す下井路の水口には、激しい水圧に耐える丈夫な堰が据えられていた（写真 33）。

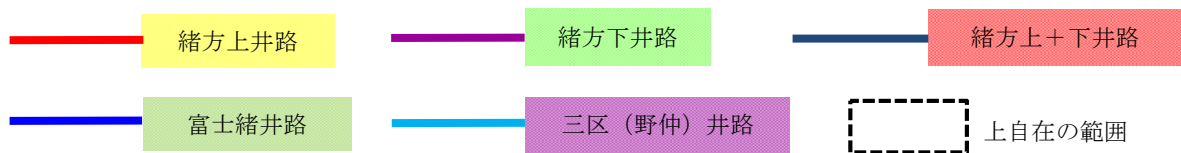
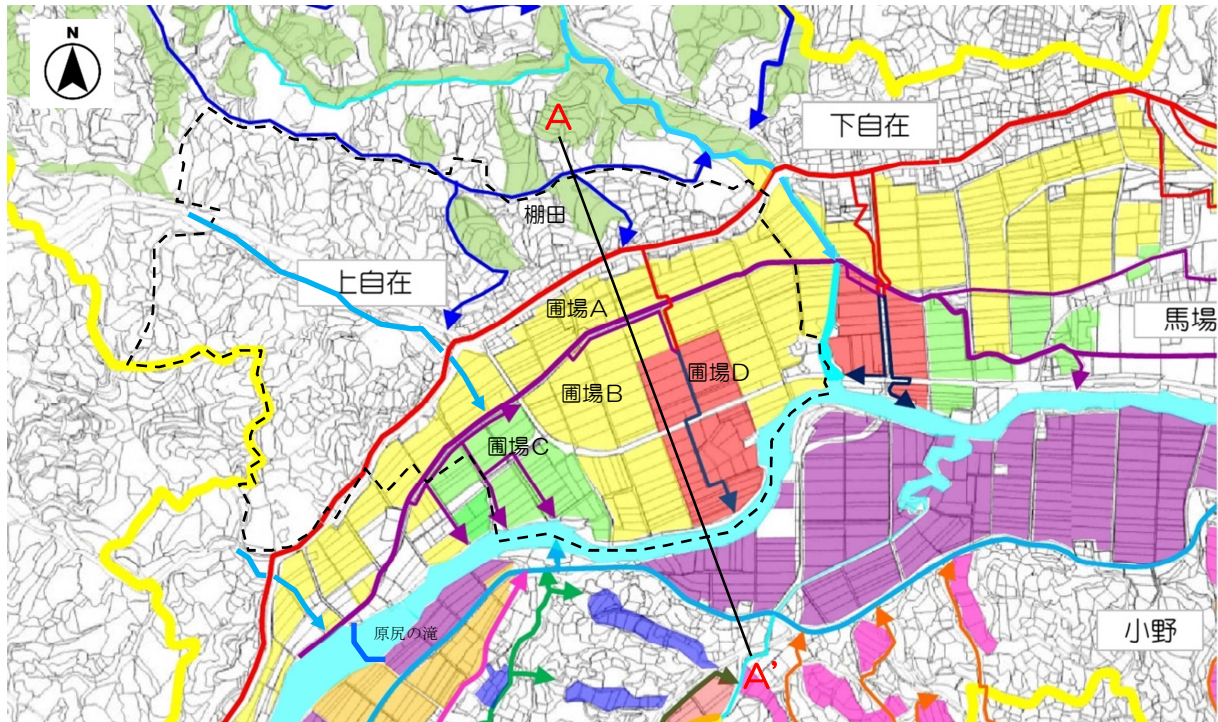


図 39 上自在地域の井路と圃場の関係図

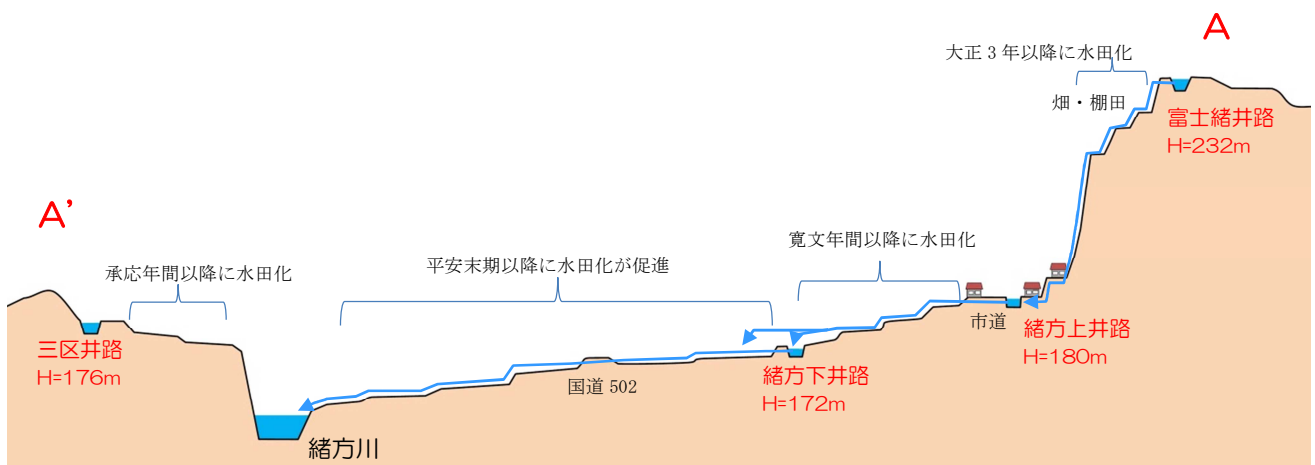


図 40 上自在地域の井路と圃場断面模式図

赤い着色（圃場D）は、緒方上井路と下井路の水を合流させて灌漑する圃場である。上井路・下井路のいずれの水だけでも不足するため、複雑な水廻りを行い広い圃場を灌漑している。単純に上井路・下井路の水をそれぞれ使うというような水廻りではなかった。圃場整備を行ったとしても、土地の高低差の影響で、田に水を巡らせるのが複雑であることがよくわかる場所である。

上自在集落の北側丘陵地は、大正3年の富士緒井路通水までは、農地は「畑」であったが（図41）、通水後は一部が水田化した。なお、井路・集落・圃場の関係を断面模式図（図40）に示しているが、詳細な断面模式図は、「第4章 第4節 1 集落の位置と農家建物の関係」を参照されたい。

④旧字図から見る上自在の土地利用

図41は、上自在地域の字接合図である。字図の製作年代が書かれていないが、他地域の字図が明治21年調製なので、おそらく上自在の字図も明治21年に製作されたものに間違いはないであろう。旧字図のうち、畑・宅地・田の地目にそれぞれ黄色・赤色・薄緑に着色をした。富士緒井路は、大正3年に上自在集落の北側丘陵上（水色の破線）に通水する。明治21年にはまだ開通していないので、丘陵地帯の農地は「畑」地目のままである。緒方上井路・緒方下井路により灌漑される段丘面は、道路沿いに宅地が10軒程度、東端の緒方三郎惟栄館跡と呼ばれる場所に宅地が1筆ある程度で、ほとんどが「田」地目となっている。旧字図を見ると、井路幹線から分かれた小井路が方形の区画（条里型地割）をかたち造っている。現在の完備された圃場でも水張りを行うのに複雑な場所があるが、圃場整備前の水張りはいかに困難であったか想像に難くない。

図42は現在の田・畑・宅地に、それぞれ緑・黄・赤で着色したものである。宅地は民家が数軒、消防署、JAの選果場、JAの米乾燥施設などが圃場地帯に増えているが、ほとんどが田のままである。上自在地域でも、緒方川上流地域で見てきたように、低地から水田開発が行われ、近代になり丘陵地帯に長距離水路が開鑿され、棚田の景観ができ上がったことがわかる。

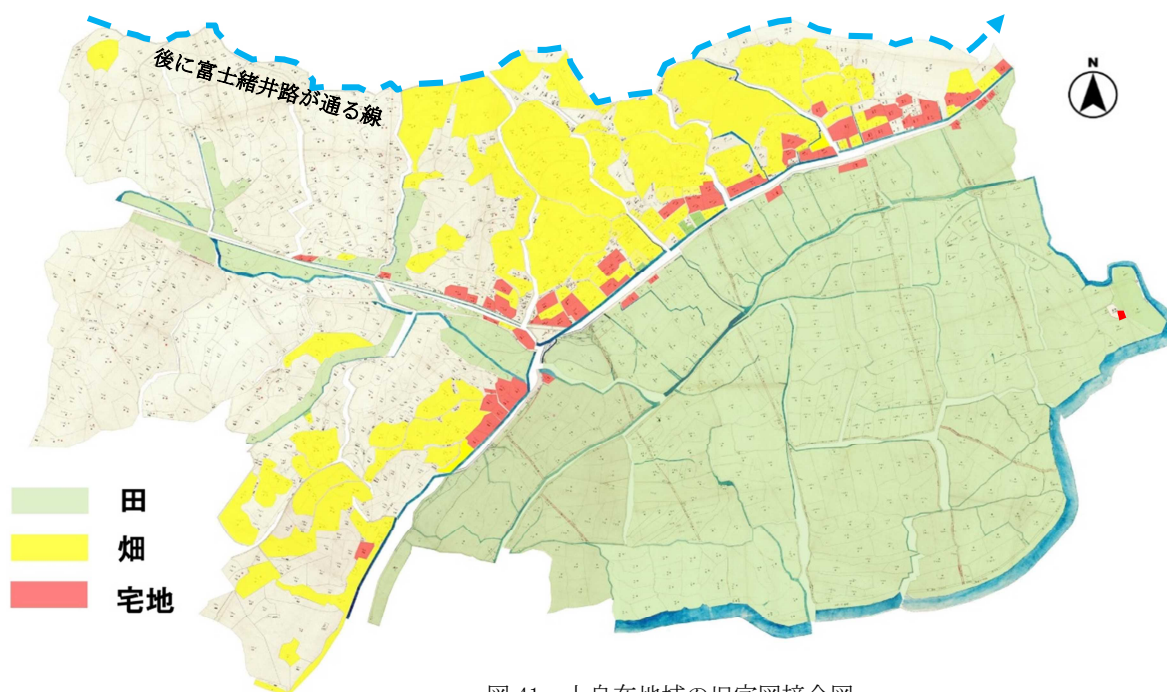


図41 上自在地域の旧字図接合図

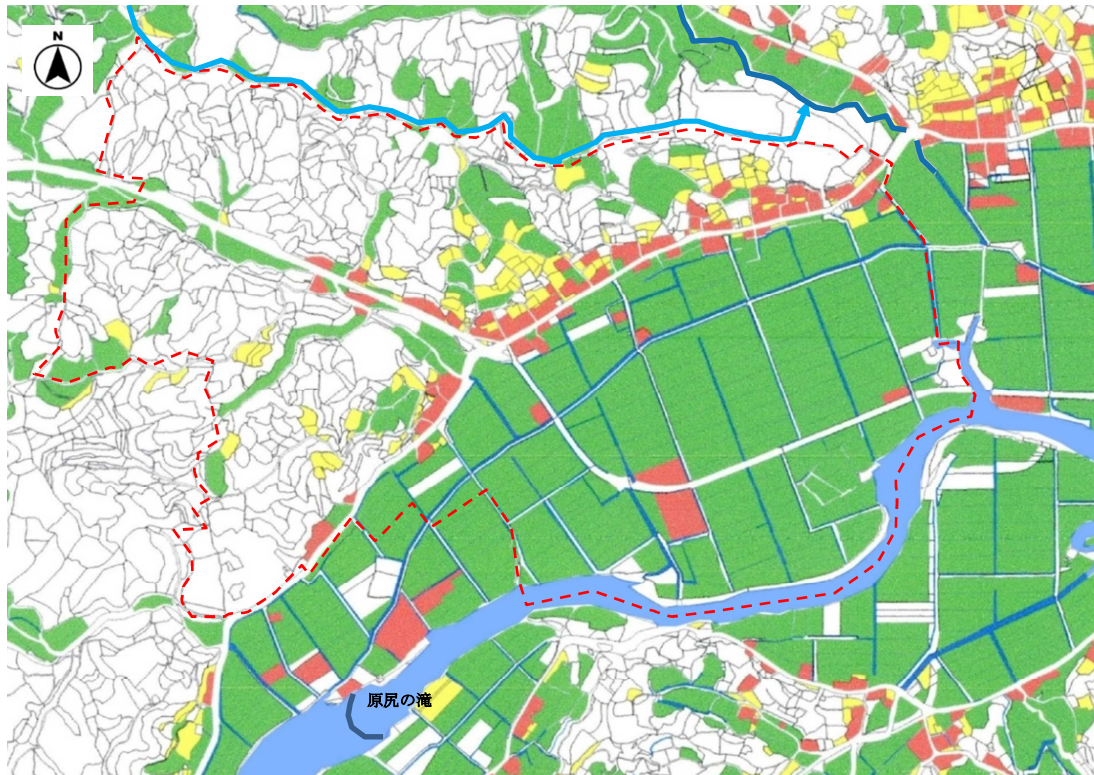


図 42 現在の上自在地域の地籍図

⑤緒方上井路と下井路のクンバ（汲ん場）

南西から北東に流れる緒方井路に沿って、多くの民家が立ち並び、緒方上・下井路に接した民家の多くがクンバ（汲ん場＝汲み場）を持つ。上自在集落を流れる緒方上井路には汲ん場が 24 ヶ所、原尻の滝上から上自在まで流れる下井路には 5 ヶ所の汲ん場がある（写真 36）。上自在集落の聞き取り調査では、上井路本流では、井路水の汚染につながる物（例えばオムツ）は洗うことはしてはならず、田につながる支線で洗うようにしていたという。上水道が整備され、集落排水事業が完了した現在では、汲ん場で物を洗うことはあまりないが、井路沿いの景観を構成する要素のひとつとなっている。

井路に接する民家の汲ん場の多くは、敷地から階段を下りて汲ん場まで至る。水面と敷地の標高差が高い汲ん場では、10 段ほどの石段を降りるものもある（写真 34 掘込階段式の汲ん場）。市道緒方中央線側に造られた民家の汲ん場は、道路敷を削って階段を造ることができないため、水路内にコンクリートの張り出しを 3 段ほど設けて汲ん場になっていることが多い（写真 35 張出階段式の汲ん場）。

例外的に、道路の広い所では掘込階段式の汲ん場が 1 ヶ所（写真 36 の No. 19）、井路に接する宅地でも、張出階段式の汲ん場を道路側に設けた場所が 1 ヶ所あった（写真 36 の No. 20）。



写真 34 掘込階段式の汲ん場 (No. 29)



写真 35 張出階段式の汲ん場 (No. 20)

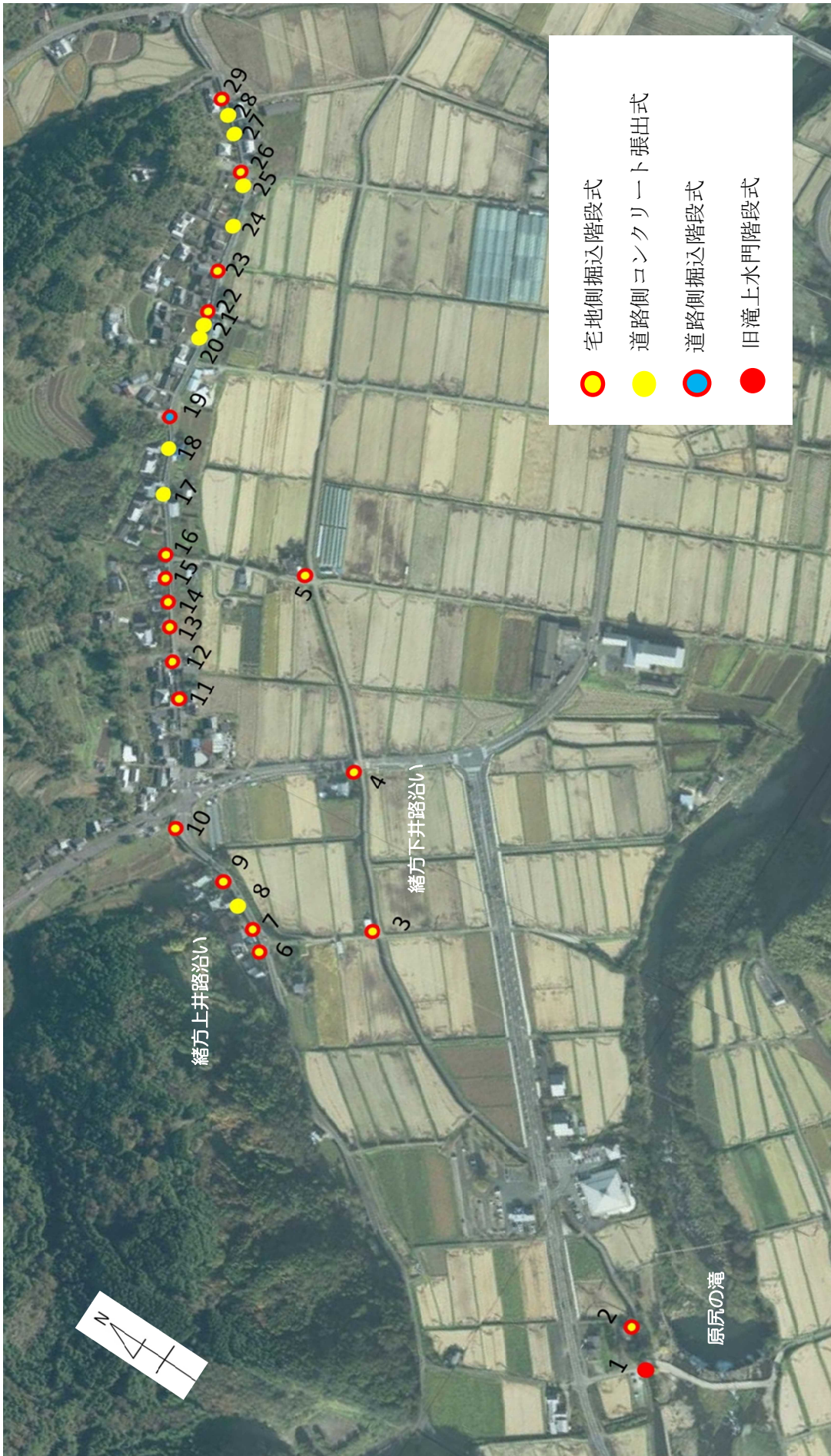


写真 36 緒方上井路（上自在）と緒方下井路（原尻の滝～上自在）の汲ん場位置図

⑥黒土甲川の架樋

緒方井路の特徴の一つとして、小河川の流れを井路にそのまま取り入れる構造があげられる。黒土甲川も緒方下井路に取り入れられ、緒方川の水と合せて大量の灌漑用水として利用されている。緒方上井路は、緒方下井路に流入する黒土甲川を渡河しなければ下流域の灌漑を成し得なかった（写真 37）。そのため非常に大きな石垣を構築し、黒土甲川を渡河している（写真 39）。この石樋には、石積み構造がよく残り、おそらく建築当時の状態をそのまま残していると思われる。黒土甲川架樋よりも上流にある石用川の石樋には、明治 21 年の築造と刻まれた石樋石碑がある。



写真 37 黒土甲川架樋の位置



写真 38 黒土甲川架樋の側面石垣



写真 39 黒土甲川架樋の隧道入口

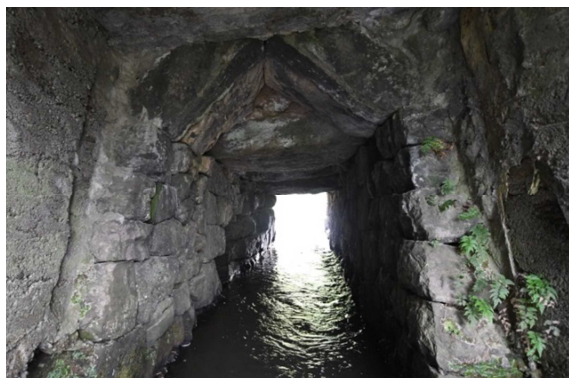


写真 40 黒土甲川架樋の内部石垣

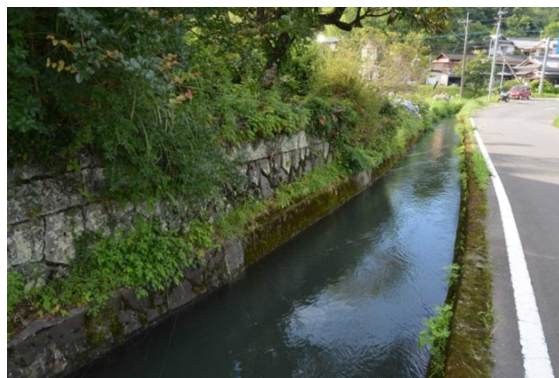


写真 41 黒土甲川架樋の上部

石用川の石樋と黒土甲川架樋の構造はよく似ており、同時期の築造と推定される。いずれも明治時代の農業土木遺産として貴重である。




⑦上自在地域の景観の構成要素

写真 42 は、上自在の三宮八幡社参道前に造られた展望所からの眺望である。緒方盆地内の水田景観と祖母・傾山系が見渡せる絶好の場所である。上自在集落は、井路沿いの家並み、汲ん場、石橋と灌漑される水田の景観が見事に調和している。展望所から緒方上井路に架かる石橋を渡り、急な石段を登ると三宮八幡社に着く。三宮八幡社は緒方三社の一つで、祭神は神功皇后である。毎年 11 月末～12 月初旬に行われる緒方三社川越し祭りの主役となり、神輿が原尻の滝上の緒方川を渡る。緒方三社のうち、川を渡る祭神は三宮八幡社だけであり、三社祭りの重要な役割を持つ。三宮八幡社は、神社建物としても緒方盆地の景観を特徴つける重要な構成要素の一つである。以下に、上自在集落の景観構成要素を掲載する。



写真 42 展望所からの眺め (10 月下旬)

表 9 上自在地域の景観の構成要素

番号	要素名	写真	説明
1	緒方上井路		緒方盆地の左岸を潤す井路で、選定予定地のうち、上井路・下井路が灌漑する面積の約 46%の圃場を潤している。写真は、緒方盆地のウォーキングイベントの風景。
2	緒方疏水の碑		全国疏水百選(農林水産大臣認定)に選ばれ、緒方井路土地改良区により平成 18 年 2 月 22 日に建てられた。井路に対する誇りが感じられる。 ※この石碑の所在地は原尻であるが、便宜上、上自在の位置図に入れている。
3	緒方下井路 (下井路の流れ)		緒方川左岸を潤す緒方下井路の流れ。水車は観光用に設置されたもので、昔ながらの型式ではないが、井路に対する思い入れの象徴である。 ※この水車の所在地は原尻であるが、便宜上、上自在の位置図に入れている。

番号	要素名	写真	説明
4	宮田		<p>緒方三社川越し祭りの際に、上自在の三宮八幡社の神輿が原尻地区との境にある宮田で神事を行う。原尻から加勢に来た担ぎ手は、畦を越えて宮田に入ってはならない。川越し祭りの中で重要な地点。</p>
5	緒方上井路の黒土甲川架樋		<p>緒方上井路が黒土甲川を越す架樋で、巨大な石を積んで石垣を造っている。水路下に入ってみないと見ることができない。上流にある石用川石碑と構造がよく似ており、明治時代の構築物と推定される。</p>
6	観光用水車(緒方下井路)		<p>緒方下井路にある観光用水車。昔ながらの形を復元したものではないが、井路に対する思い入れがわかる。</p>
7	高尾山神宮寺		<p>三宮八幡社の神宮寺と言われる。本尊は十一面観音である。境内には五輪塔または宝塔の笠・胴の部分が安置されている。</p>
8	後藤家石橋		<p>緒方上井路に架けられた橋で、東側要石に架橋年が刻まれている。明治36年(1903)に架橋され、橋長4.25m、橋幅1.9m、径間2.74m、拱矢0.85m、環厚は30cm、高欄がある1連アーチの石橋である。</p>

番号	要素名	写真	説明
9	金毘羅塔		慶応8年（1867）に建立された。常夜灯として使用されている。緒方盆地内の主要道路にふさわしい堂々とした塔である。
10	観光用水車（緒方上井路）		観光用に設置された水車であるが、緒方井路にたくさんあった水車を彷彿させるものである。
11	後藤家蔵 （元富士緒井路事務所）		富士緒井路土地改良区の事務所として、後藤家が2階を貸していたという。窓枠などが改修されているが、当時の面影を残している。
12	三反畑板碑 （県指定有形文化財）		天授三年（1377）銘の板碑であるが、緒方惟栄が三宮八幡社御仮屋から投げたという伝説がある。「三反畑」という字名により、上自在のこの場所が、天授三年当時は畑であったことを示す板碑である。
13	三代家邸宅		明治時代に建築された建物で、当時の豪農の邸宅の状況がよく残されている。また近接して、落とし小屋付の畜舎（居宅に改築）も残されている。

番号	要素名	写真	説明
14	三代家石橋		三代家住宅につながる石橋で、自動車が通るため入口を拡幅している。橋のもとには汲ん場もあり、緒方上井路の景観を特徴付けている。
15	京塚		三宮八幡社から西へ約 550m の場所に京塚山（標高 245m）があり、10m 四方の塚は夥しい数の葺石で覆われている。おそらく経筒を埋納した塚であろう。三宮八幡社の境内周辺から永久 3 年（1115）銘の経筒ほか 1 本が出土しており、この尾根上は 12 世紀初頭には聖地となっていたことがわかる。
16	頭取宮川碑		御国頭取宮川碑は嘉永元年（1848）に製作された。相撲の由来と門人 37 人が師匠宮川の恩に感謝し石碑を建立したものである。軸丸棚田・緒方盆地の範囲には、これを含めて 4 基の相撲取りの記念碑がある。
17	堅牢地神塔		春分秋分の日以最に近い戌の日が「社日」でこの日は土を動かしてはいけないなどといい、地神を祀る地神講がある。この講が建てた石塔が地神塔で、天明 6 年（1786）に建てられた。 軸丸北では、雨乞い峠に建てられ、雨乞いの対象になった地神塔もある。
18	三宮八幡社御仮屋の鳥居		三宮八幡社の御仮屋で、緒方五千石祭が開始されるまでは、神輿はこの地に御幸していた。現在も除草などの管理がよく行われている。落ちている額東背面部には「弘化四丁未年 春二月吉日」と刻まれている。

番号	要素名	写真	説明
19	瘞白小石碑		文政7年(1824)、岡藩主中川久教の時、三宮八幡社境内から経筒が出土した。久教は「誰が埋めたかわからないが、祖先の冥福を祈るものに疑いはない。庶民に善を勧め、悪を懲らしめることをこいねがう一助にしたい」と記念碑に記した。三宮八幡社から2本も経筒が出土しており大変珍しいが、この経筒は行方がわからない。
20	瘞古器碑		宝暦8年(1759)、上自在村で酒店を営もうとしていた者が地面を掘り起こしたところ、短刀とともに銅経筒が出土した。岡藩庁に届けられたところ、藩主中川久貞は経筒にある「父母孝養」の文字に感動し、記念碑を建て領民に顕彰するよう記した。
21	三宮八幡社 (敷地内の鳥居等、 山門、灯籠など)		治承2年(1178)、緒方三郎惟栄による建立と伝承される。祭神は神功皇后で、緒方三社川越し祭りの際に、緒方川を渡り対岸の二宮八幡社・一宮八幡社の祭神と出会う。川越し祭りは、緒方川や緒方の井路に感謝する祭りで、三宮八幡社はその主要な舞台である。
22	緒方井路碑		緒方上井路・下井路の開発史を記したもので、上自在・下自在・馬場・井上・野尻・越生・原尻の地主が資金を出し明治34年に建立された。下井路の工事は寛永8年(1631)に始まり、上井路は寛文2年(1662)に竣工したという。
23	緒方井路改修之碑		昭和16～18年にかけて、緒方井路をコンクリートまたは三和土で補修する工事を実施した工事記念碑である。改修工事設計者は大分県農業技師小野安夫である。小野技師は、富士緒井路白水溜池堰堤(国重文)の設計も行っている。

番号	要素名	写真	説明
24	三宮八幡社参道石橋		<p>緒方三社の一つである三宮八幡社の参道橋で、緒方上井路に市道緒方中央線から架かる橋である。架設年は不明、橋長 4.25m、橋幅 2.8m、径間 2.65m、拱矢 0.95m、環厚 25cm の高欄がある 1 連アーチの石橋である。アーチの形状がおむすび型であるのは、要石の幅が他の石よりも狭いためである。</p>
25	緒方三郎惟栄館跡 (市指定史跡) 境内内鳥居、緒方神社石祠、緒方三郎惟栄館跡記念塔		<p>平安末期に緒方庄の庄司を務めた緒方三郎惟栄の館跡と伝えられる。緒方神社があったが大正 5 年に焼失し石祠が建てられた。昭和 12 年には惟栄を記念する塔が建てられた。</p>
26	歌碑（宮中歌会始 入選作の歌碑）		<p>この短歌は宮中歌会始のお題「道」に、三代英輔氏が応募し入選したもの。上自在地区の圃場整備に携わり、その農道と圃場を利用し万羽の養鶏を実現できた思いを込めて詠んでいる。平成 10 年 10 月に建立。</p>
27	上自在地区圃場整備 備碑		<p>上自在地区の圃場整備完了を記念し、建てられた。</p>

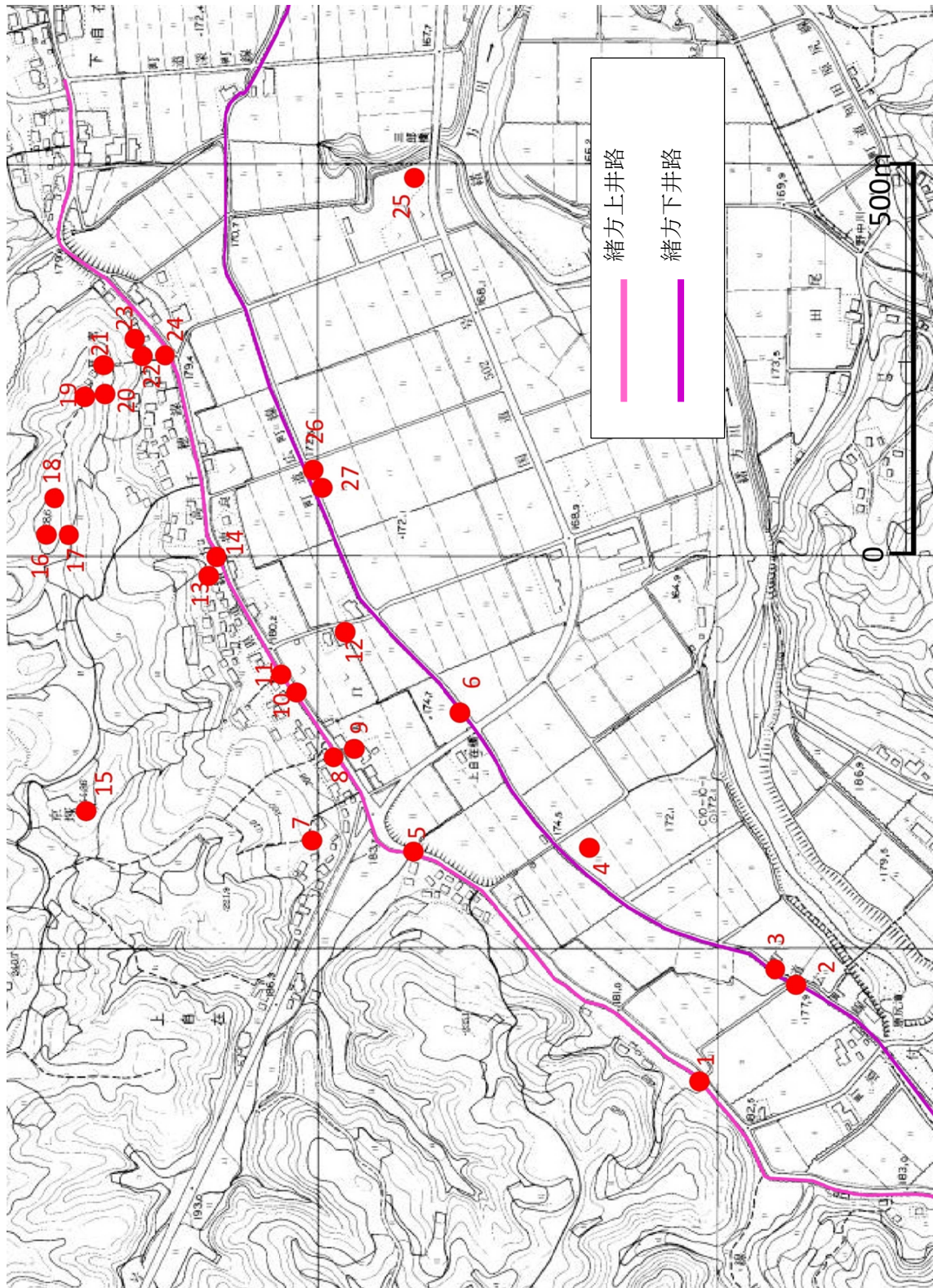


図 43 上自在地域の構成要素の位置図

6 下自在地域の景観

①下自在地域の概要

1 自治区の成立（※1～2は『緒方町誌 区誌編』を参考にした）

江戸期	岡藩領軸丸組（下自在村、軸丸村、馬場村から成る）。
明治 22 年（1889）	町村制実施により、緒方村大字下自在となる。
昭和 25 年（1950）	町制施行により、緒方町大字下自在となる。
平成 17 年（2005）	町村合併により、豊後大野市緒方町下自在となる。

2 主な出来事

寛文 2 年（1662）	緒方上井手開鑿。
寛文 11 年（1671）	緒方下井手の掘り貫きが完成し通水。
安政 6 年（1859）	岡藩主中川久成が下自在村で田植見物（御覧田植）。本陣は小庄屋吉良家。
明治 4 年（1871）	吉良酒造が開業。
明治 22 年（1889）	浜嶋酒造が開業。
大正 11 年（1922）	下自在郵便局開業。
昭和 30 年（1955）	緒方町立緒方中学校新築。
昭和 43 年（1968）	下自在公民館竣工。
昭和 44 年（1969）	大分県立緒方工業高校開校。
昭和 46 年（1971）	緒方町中央公民館竣工。
昭和 48 年（1973）	県営圃場整備着手、翌年完工。
昭和 59 年（1984）	緒方町立歴史民俗資料館竣工。
平成元年（1989）	緒方町総合運動公園開発に伴う千人塚遺跡発掘調査開始、翌年終了。
平成 7 年（1995）	緒方町総合運動公園竣工。
平成 12 年（2000）	現在の緒方中学校開校。

3 下自在地域の構成・人口など

組合名	辻一、辻二、中州一、中州二、枝石一、枝石二、上市、中市、下市、今宮一、今宮二、小柳、長迫一、長迫二、下津留、中津留、大道、戸ノ上一、戸ノ上二、戸ノ上三、
戸数・人口	268 戸、649 人（令和元年 12 月）

②下自在地域の立地と環境

下自在集落は、上自在集落の東側に緒方上井路に沿って民家が立ち並ぶ。上自在集落とは異なり、民家は緒方上井路・市道緒方中央線の両側に多く立ち並ぶ。これらの民家は、緒方川によって形成された第 1 段丘面上に建てられている（写真 43）。水田は、主にこの集落から南側に広がる第 2 段丘面に営まれている。緒方上井路の南側の第 1 段丘面からは、第 2 段丘面の圃場が見渡せ、遠方に見える祖母・傾山系の眺望が素晴らしい。そのためか、近年は水田をやめて宅地に転用される田が多くなっている。

緒方上井路の北側に形成された集落内には、多くの畑地がある。下自在集落の畑地は、上自在

のように富士緒井路が通水しなかったため、集落の北側傾斜面に多く残っている。ここから更に北側には、「下自在台地」と呼ばれていた丘陵地があった。平成2年以降、総合運動公園の開発が始まり、同時に行われた百合丘団地造成により丘陵は姿を消した。更には、運動公園の西側丘陵を削り、新緒方中学校が建設され、下自在台地の景観は大幅に変わった。下自在台地上には、室町時代に大規模な墓地在営まれ、約170基の中世墳墓群が造営された。総合運動公園の開発に伴い消滅したが、中世墳墓群のほかに近世墓も多数営まれていた。ここでも上自在集落のように、耕作地を活かすために墓地が高台に営まれている。現在、これらの墓所は運動公園の一角に霊園がつくられ、そこに移転している。

下自在地域の景観選定予定地は、開発行為により造成された総合運動公園の南端から緒方川の間である。昭和30年に長谷川村・上緒方村・小富士村・緒方町が合併し、新しい緒方町が発足した。昭和30年の新役場庁舎竣工（馬場地域）を皮切りに、町立緒方中学校、大分県立緒方工業高校、緒方公民館、農協、商店などが次々と建設され、隣接する馬場地域とともに緒方町の市街地を形成していった。豊後大野市が策定した「豊後大野市景観計画」では、緒方盆地を「緒方盆地文化的景観（景観形成重点地区）」と定め、その中を「田園エリア」と「市街地エリア」に区別している。写真43の黄色い破線で囲んだ範囲は、開発行為が進み旧来の農村景観が著しく変貌している地域であるため「市街地エリア」とし、「田園エリア」よりも規制を緩くしている。

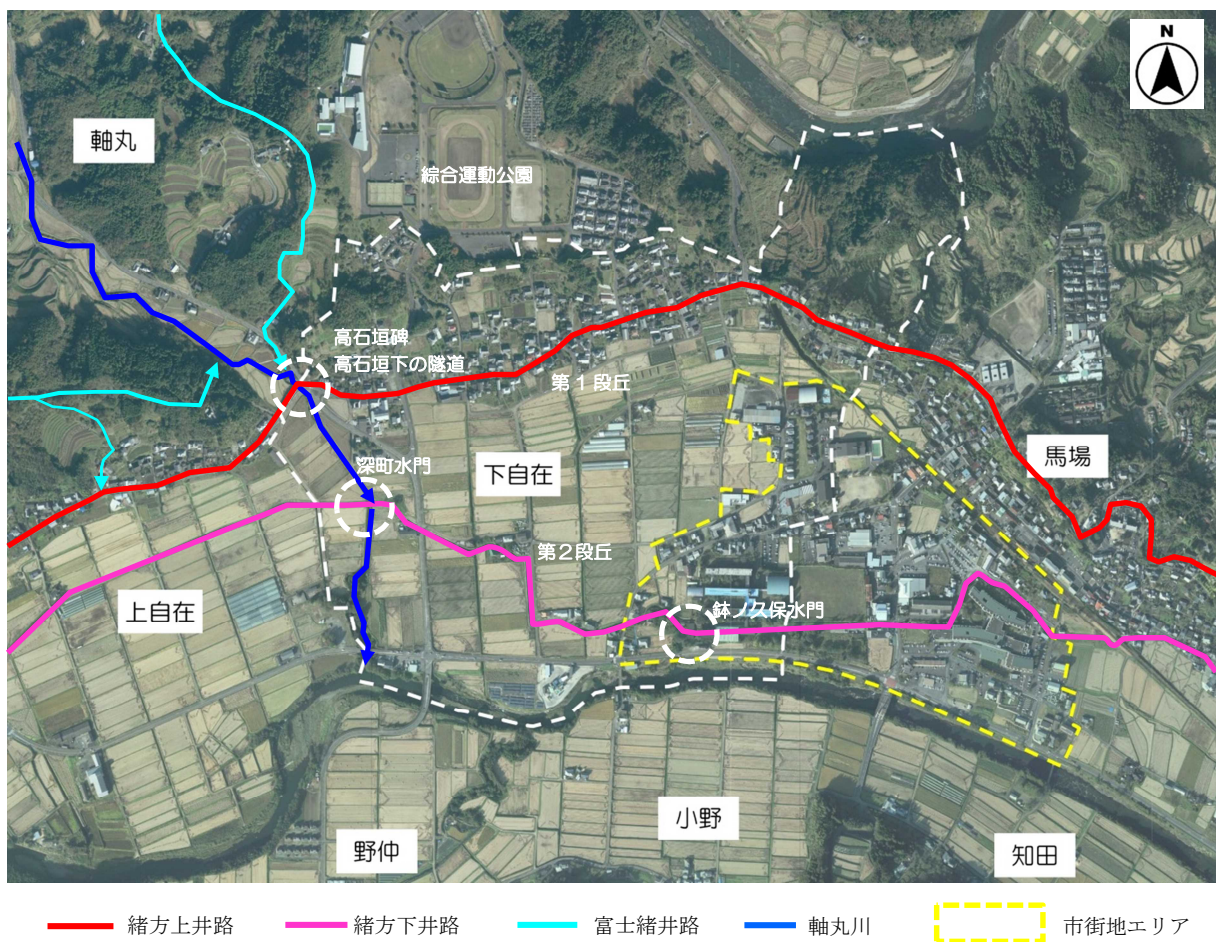


写真 43 下自在地域の位置

③下自在地域を潤す井路と圃場

緒方川によって形成された段丘面を潤すのは、緒方上井路と緒方下井路である。下自在地域の圃場は、昭和48年に農業基盤整備が実施され、整備前の圃場枚数は636枚であったが整備後には189枚と減り、大幅に圃場の拡幅が行われた。そのため、上自在地域と同様に、平安末期に形成されたとされる条里型地割の痕跡はない。図44は、緒方上井路と緒方下井路がどのように圃場を潤しているのかを色分けしたものである。黄色い着色（圃場A）は緒方上井路により灌漑される場所である。圃場Bは、緒方上井路の水が下井路の上を渡り灌漑する場所で、しかも下井路の水も合わせて灌漑する場所である（写真44）。緑色の着色（圃場C・D）は、緒方下井路のみによって灌漑される圃場である。圃場B・圃場Cは、原尻の滝上に築かれた下井路堰堤から約2kmも下った地点であるが、灌漑される面積は約7.53haしかない。巨大な堰堤を持つ下井路が大規模に灌漑できる場所は、更に下流地域まで行かなければならないということである。



写真44 緒方下井路を渡る上井路の水

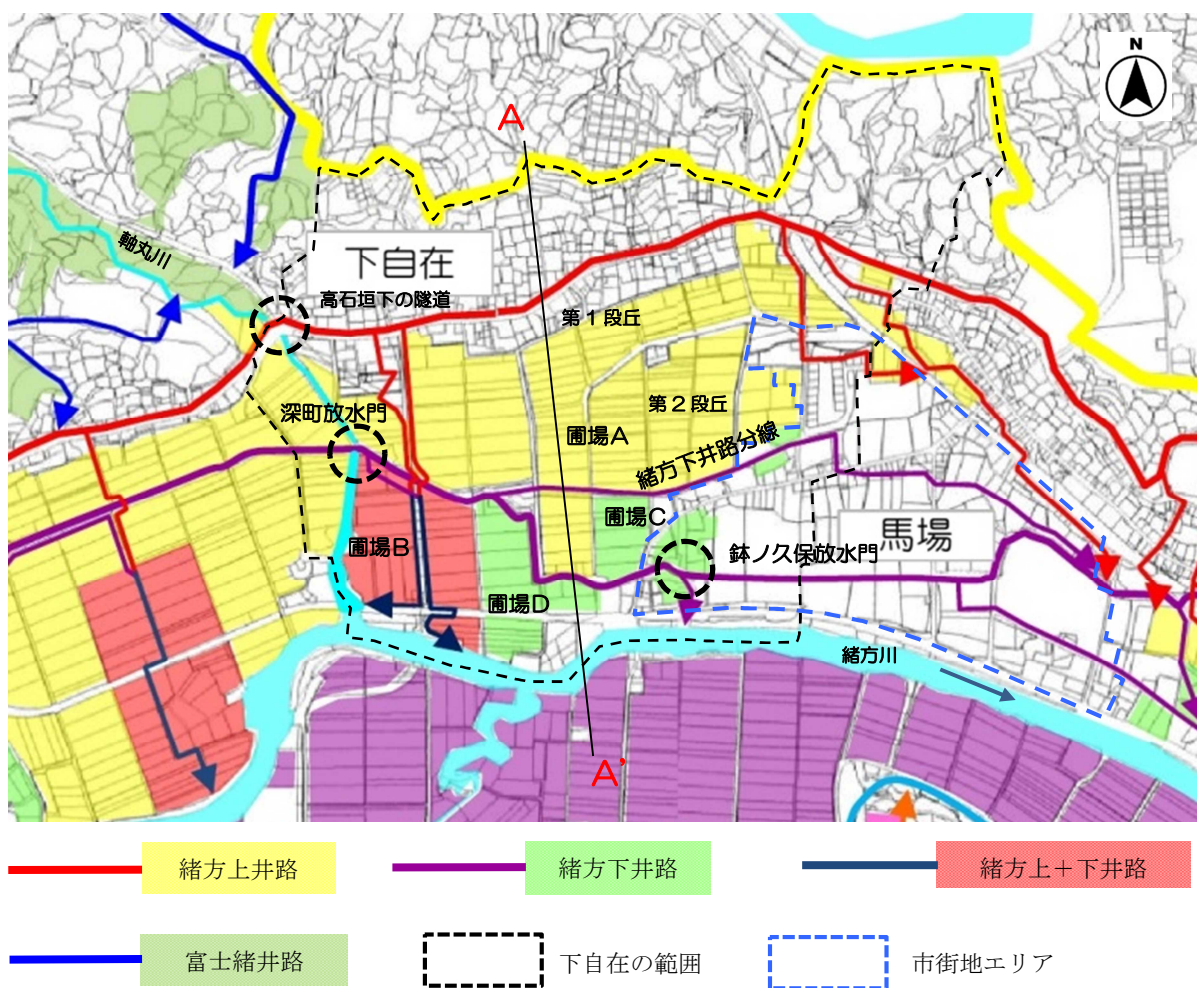


図44 下自在地域の井路と圃場の関係図

図 45 は下自在地域の断面図（図 44 A-A' 間）である。この断面区間では、圃場のほとんどが緒方上井路により灌漑されている。図 44 に示した緒方下井路分線は、図 44 の圃場 C 部分を主に潤すため造られている。下自在と馬場の一部が市街地と化したため、緒方下井路分線が灌漑する面積は少なくなった。

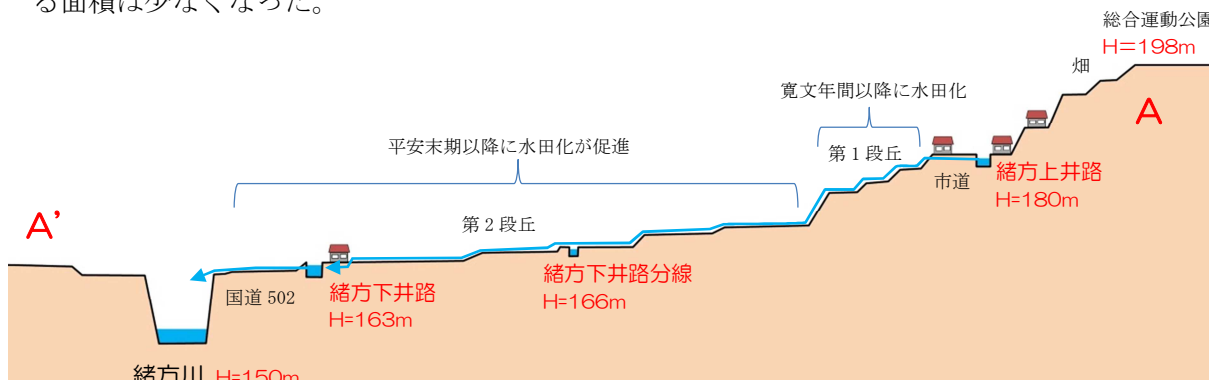


図 45 下自在地域の井路と圃場断面模式図

④下自在地域の旧字図と現況

図 46 は下自在地域の旧字図である。製作年代が書かれていないが、緒方町域の他の地域では「明治 21 年調製」との記載があるので、これも同様と判断して間違いはないであろう。旧字図のうち、田・畑・宅地の地目にそれぞれ薄緑・黄色・赤色に着色をした。図 46 を見ると、緒方上井路・下井路によって灌漑される場所は、みごとに「田」であり、水がかからない場所は「畑」と

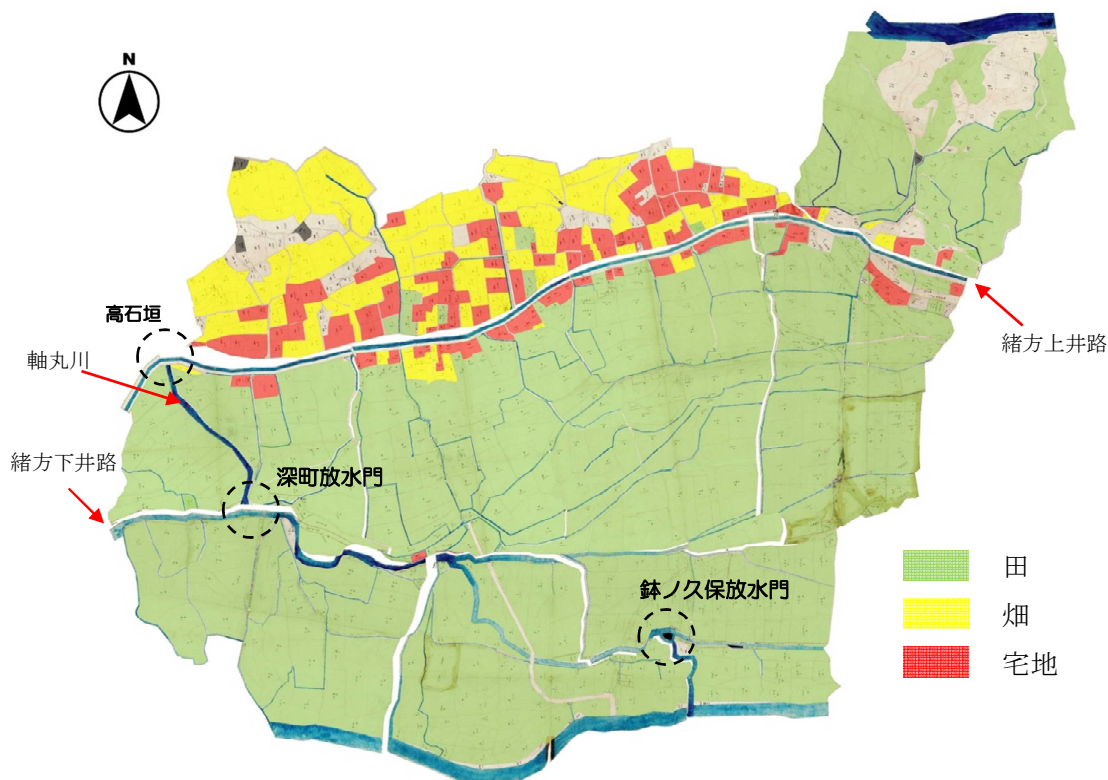


図 46 下自在地域の旧字図

して利用されていることが一目瞭然である。下自在地域も上自在地域と同様に、寛文年間に始まった緒方上井路の開鑿により、緒方下井路と丘陵地帯の間の段丘が水田化された。それに伴い集落が丘陵側に移動し、現在の井路沿いに集落が並ぶ独特の景観ができあがった。旧字図では、下井路の流れに沿って形成された方形の区画が確認できる。条里型地割の痕跡であろう(第3章 第2節参照)。

図47は現在の地籍図で、田・畑・宅地の地目にそれぞれ薄緑・黄色・赤色に着色をした。明治時代に比べて圃場内に宅地がかなり目立つようになっている。

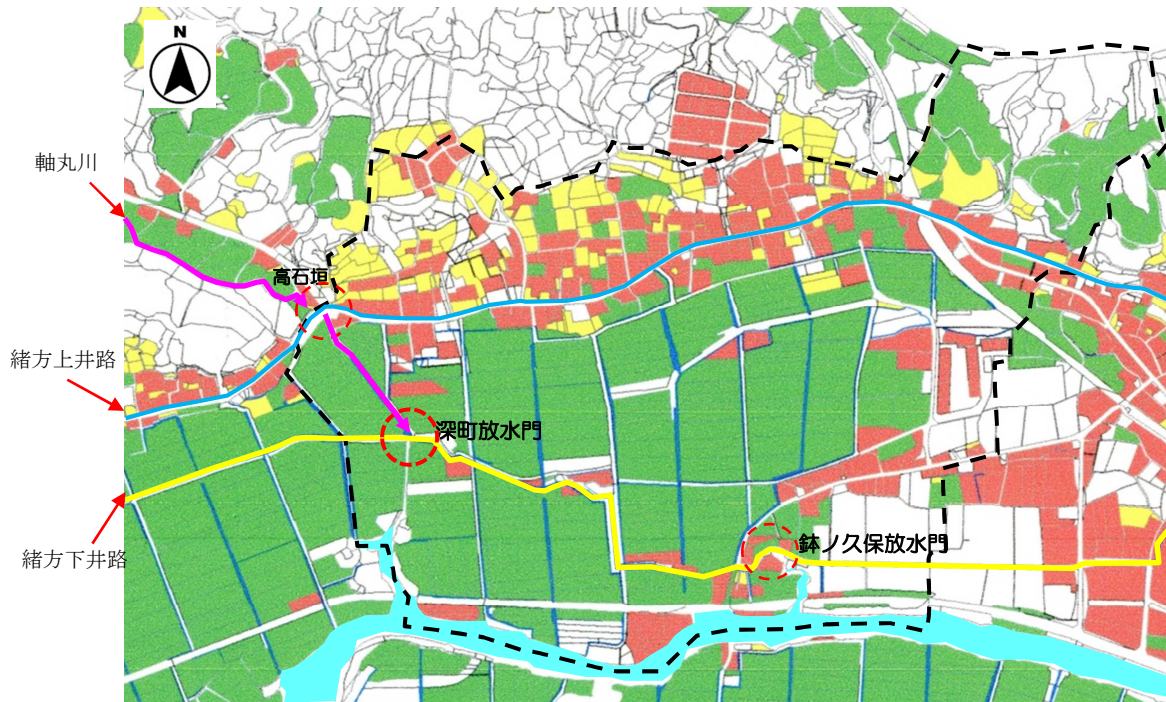


図47 下自在地域の現在の地籍図

⑤高石垣・隧道、深町放水門、鉢ノ久保放水門

下自在地域で、緒方井路に関して重要な地点が三つある。一つ目は高石垣とその下の隧道である。高石垣は、明治12~13年頃に、軸丸川により形成された低地を緒方上井路が渡河するために、巨石を積みあげ石樋としたものである。軸丸地域から緒方川方向を見ると、まるで堤防のようである(写真45)。安政6年の若殿様御覧田植の絵図面には石垣のような絵が描かれているので、江戸時代から既に石垣であったのであろう。この石垣の下を軸丸川が通過し緒方盆地に流れ込

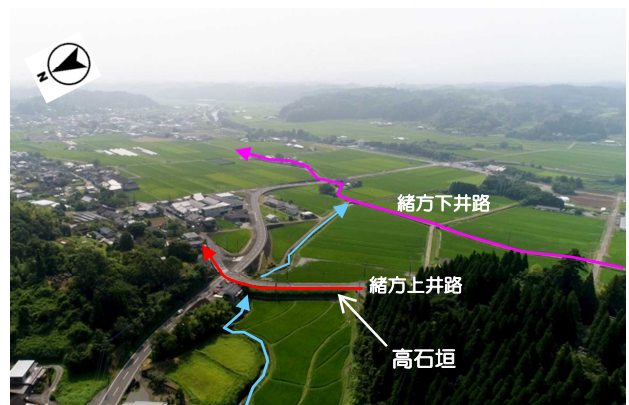
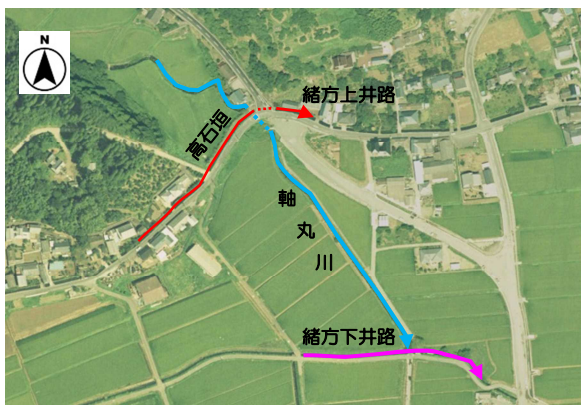


写真45 高石垣と軸丸川・緒方上・下井路

でいるのであるが、軸丸川の左岸は凝灰岩の岩体であり、そこに隧道を掘っているのである。その理由は判然としないが、軸丸川が氾濫し度々石垣を損壊していたと思われる。そのため、軸丸川の流路を低地の東端に移動させ、岩体を掘り貫き洪水にも耐える隧道を掘ったのではなかろうか。写真 46 は、高石垣の下の隧道である。方形に穿たれ、壁面には鑿の跡が残っている。掘削年代は不詳である。



写真 46 高石垣下の隧道



写真 47 高石垣を流れる上井路

高石垣下の隧道を抜けた軸丸川は、深町放水門（写真 48）で堰き止められ、緒方下井路に合流する。下井路の原型井路は、軸丸川を水源としたもので、ここから下流域の井上・野尻地域を潤したと考えられている。緒方盆地左岸の圃場面積の約 4 割を占める井上・野尻地域を潤すには、大量の水が必要であった。飯沼賢司先生の説によれば、緒方三郎惟栄が原尻の滝上に堰堤を築き、今の深町放水門あたりまで水路を引き、軸丸川と合流させ、大量の水を井上・野尻地域に送ったという。深町放水門は、軸丸川と原尻から流れてくる緒方下井路の水量調節の場所として、重要な役割を担っている。

軸丸川が緒方下井路に合流すると、その水量は膨大なものになる。多量の降雨時には、豊富な水量が逆に災いをなすことになりかねない。そこで、深町放水門で水量調節を行うのであるが、捌ききれない水を下流域で放水する必要がある。そのために、緒方川に下井路が近く、排水溝として利用できる地形であった鉢ノ久保に放水門（写真 49）が築かれたのであろう。



写真 48 深町放水門



写真 49 鉢ノ久保放水門

⑥緒方上井路と下井路のクンバ（汲ん場）

下自在地域も緒方上井路沿いに民家が建ち並び、それに付随したクンバ（汲ん場＝汲み場）が37ヶ所確認できた。また、下井路では、2ヶ所汲ん場が確認でき、そのうち1ヶ所は新装であった（写真52）。井路に接する汲ん場の多くは、上自在集落と同様に、敷地から斜面や階段を下りて汲ん場まで至る（写真50 掘込階段式の汲ん場）。市道緒方中央線に沿って立つ民家の汲ん場も、コンクリートの張出階段式（写真51）である。市道側の民家は、通常コンクリートの張出階段式の汲ん場を造るのであるが、市道から水面まで標高差が高い場合、写真53のように対岸に橋を渡して、掘込階段式の汲ん場を造っている場所もある。なお、38ヶ所にも及ぶ汲ん場は全て紹介しきれないので、写真54のとおり、位置図で示す。



写真50 掘込階段式の汲ん場 (No. 1)

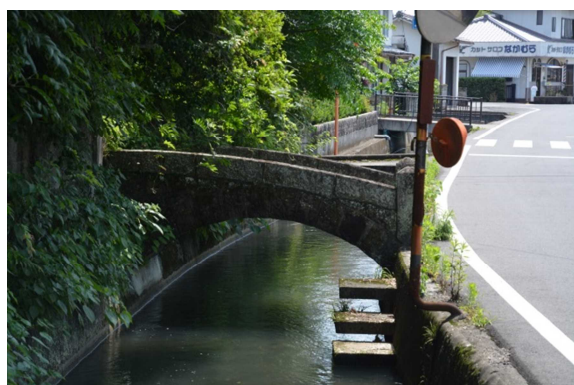


写真51 張出階段式汲ん場 (No. 28)



写真52 新装の汲ん場 (No. 39)

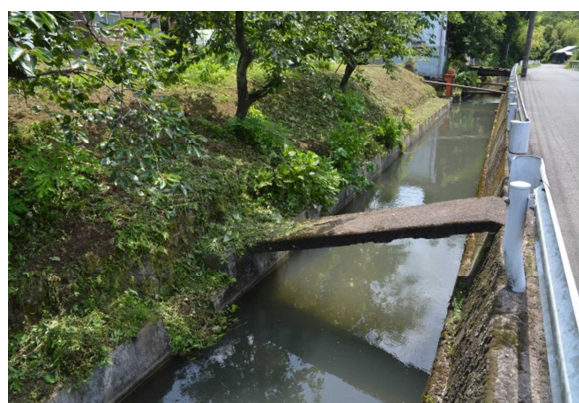


写真53 対岸に渡る汲ん場用の橋 (No. 36)

⑦下自在地域の景観の構成要素

下自在地域は、江戸時代は軸丸組下自在村で、嘉永7年（1857）の人口は333人であった。大正11年に隣の馬場地域に豊肥線緒方駅が開業し、それに伴って市街地化し人口も増加した。昭和7年には、軸丸の人口を抜き、馬場地域とほぼ同じとなった。馬場地域は旧緒方町の中心街として栄え、平成12

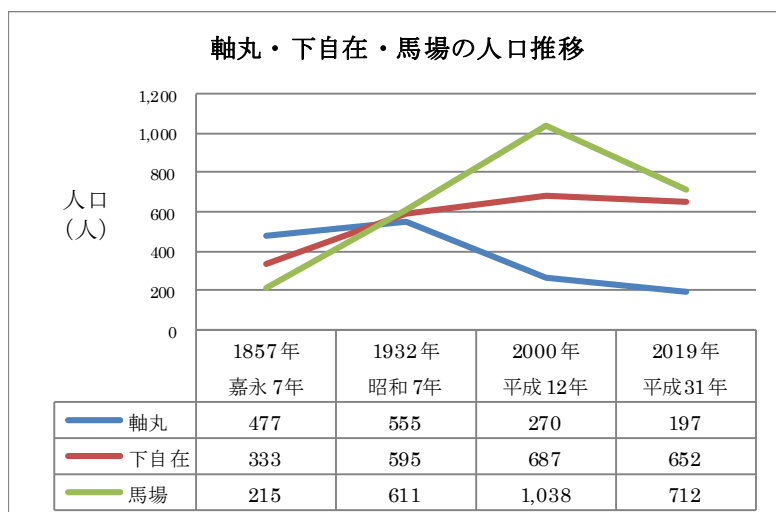


表10 軸丸・下自在・馬場の人口推移

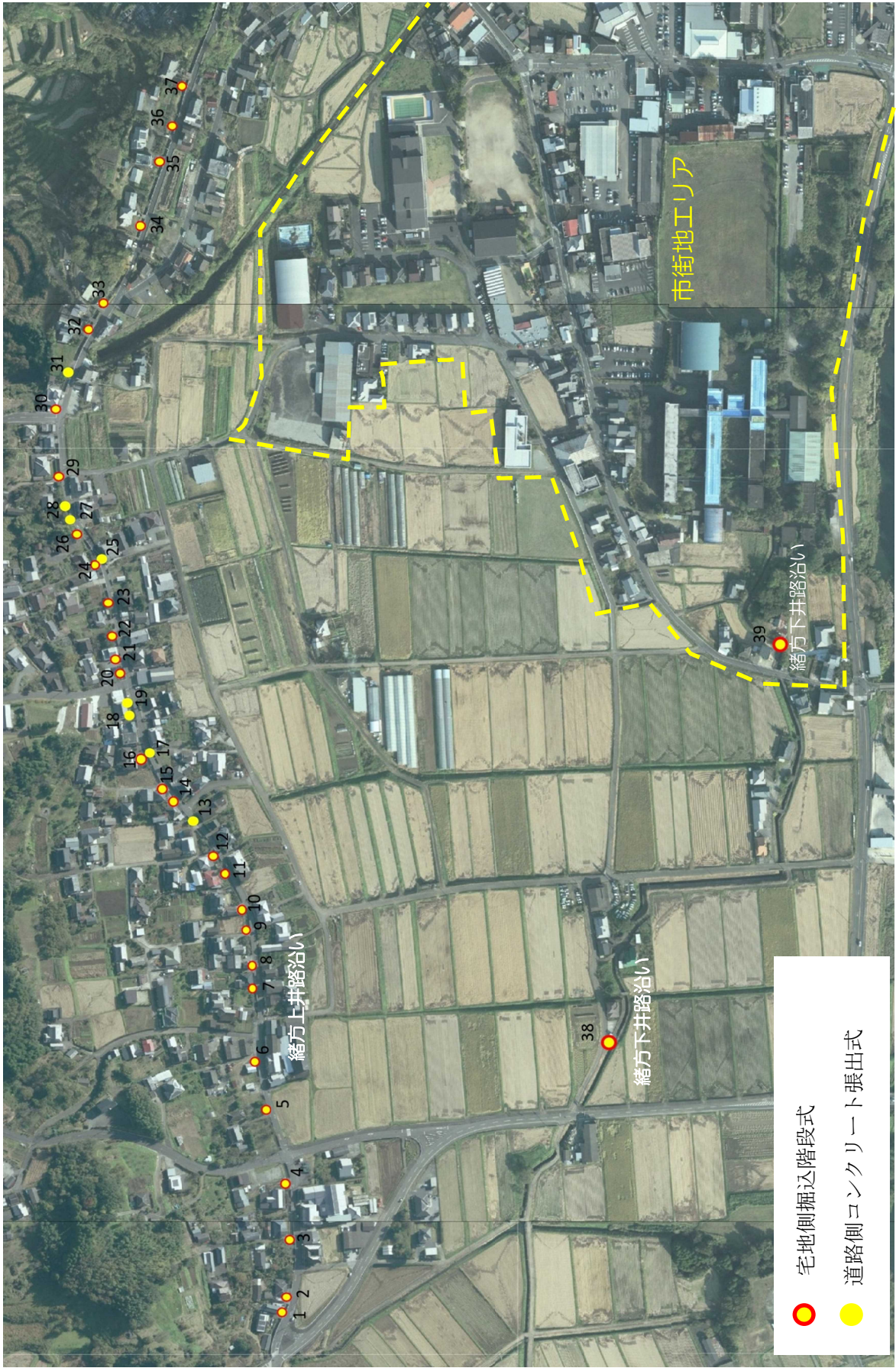


写真 54 下自在地域の汲ん場

年には人口が1,038人に達するが、それ以降徐々に減少し、平成31年には下自在地域の人口差は60人となった。下自在地域の人口が急激に減少しない理由は、総合運動公園開発時に台地上に分譲住宅地を造成したことによる。また、旧緒方中学校移転に伴い学校跡地も分譲住宅地としたため、急激な人口減を免れている。

下自在地域は、豊肥線鉄道開通をきっかけに盆地内の宅地化が進行していった。文化的景観選定予定地内ではあるが、市街地化した部分については、以前の水田景観の面影はあまりない。

しかしながら、「米どころ緒方」を象徴する酒屋が2軒並び立つ緒方上井路沿いの景観や多数の汲ん場、唯一残る灌漑用水車、第1段丘面から遠望できる祖母・傾山系と圃場の眺めなど、昔ながらの農村景観が残されている。








写真 55 酒米を蒸す蒸気（浜嶋酒造、12月）



写真 56 吉良酒造と圃場（6月）

表 11 下自在地域の景観の構成要素

番号	要素名	写真	説明
1	高石垣ノ石樋之碑 （『緒方水路史』に書かれた名称）	 	<p>明治12～13年頃に軸丸川の上を渡る架樋を、多くの石材を集めて架け替えたことが記されている。この場所は安政6年に実施された御覧田植（岡藩主による）の絵図面に、既に石垣として描かれている。</p>
	高石垣		<p>令和2年9月、除草を行ったところ見事な石垣が姿を現した。緒方井路関係者でも、これほどの石垣が築かれていることを知る人は少ない。まさに高石垣の名にふさわしい巨大な井路の構築物である。</p>

番号	要素名	写真	説明
2	高石垣		上部から見るとコンクリートで固められているが、本体は石垣である。軸丸川により形成された低地を渡るため、延長 63m の石垣が築かれた。
	高石垣の南側壁面		上井路内側の南側壁面には、現在も石垣が姿を現している。巨大な石を組み合わせて石垣にしている。
	高石垣下の隧道		高石垣の下の隧道。高石垣のある場所は、軸丸川の末流であり、凝灰岩の岩盤を掘り抜いて軸丸川を緒方下井路に流入させている。トンネルを掘った時期は不明である。
3	金刀比羅社		明治の中ごろ浜嶋酒造の初代が博多から持ち帰り安置した。下自在から上自在の圃場が見渡せる。
	金刀比羅社参道の石橋		金刀比羅社の参道には石橋が架けられている。二本の桁橋で中央はコンクリートで埋められている。

番号	要素名	写真	説明
4	矢倉家橋		緒方上井路に架かる石橋である。明治42年(1909)に架橋され、橋長3.56m、橋幅4.16mの石橋である。橋桁下の支え石や敷地の石垣との眺めが良い。
	矢倉家橋		石橋は6本の桁橋である。一部コンクリートで拡張している。
5	浜嶋酒造 (鷹来屋)		明治22年創業の酒屋。豊後大野市に4つの酒屋があるが、緒方に2軒あるうちのひとつ。吉良酒造と隣り合い、米どころ緒方を象徴する酒屋である。
6	下自在の石風呂		緒方町域にある11の石風呂のうちのひとつ。明治15年頃までは盛んに使用されていたという。横に掘り込まれた溝は、焚いた火熱が床石に行き渡るためのもの。床石はなくなり、火を焚く火室も埋もれている。
7	吉良酒造		明治4年創業の酒屋。豊後大野市に4つの酒屋があるが、緒方に2軒あるうちのひとつ。浜嶋酒造と隣り合い、米どころ緒方を象徴する酒屋である。現在は使われていないが、レンガ造りの煙突が珍しい。

番号	要素名	写真	説明
8	町の鍛冶屋		昭和 21 年、河野八之助氏が当時の緒方町長に招かれ鍛冶屋を始め、平成 9 年までの 51 年間営業を続けた。河野氏は、水車や農機具、水路の水門、水路の水口、サトイモ掘り器などを製作し、建設機械の溶接など緒方の農業を側面から支えた。
	町の鍛冶屋(内部)		旧緒方町時代に、河野家と建物所有者の吉良酒造の承諾を得て、鍛冶屋の仕事場を観覧できるように展示した。 現在は、所有者の吉良酒造が観光客の観覧のため管理を行っている。 左は鍛冶屋の内部写真。
9	弘法大師像		吉良酒屋の前にある大師像である。緒方井路沿いには、弘法大師像がいくつかあり、井路の景観を彩っている。
10	弘法大師像 地蔵像		緒方上井路沿いの弘法大師像と地蔵像。下自在は井路沿いの目立つ場所に大師像を安置している。上井路沿いには柿の木がよく植えられており、秋の実りの時期には景観に彩りを添える。
11	首藤家水車		緒方町に現存する唯一の実用水車。汲み上げられた水がサイフォンを伝って、46m離れた水田(写真の右手奥)まで井路の水が引かれている。

番号	要素名	写真	説明
12	下自在圃場整備記念碑		昭和 49 年 5 月に完工した圃場整備の記念碑で、整備した圃場が見える場所に建立された。
13	田北家石橋		大正 14～15 年(1925～1926)頃に架橋され、橋長 3.46m、橋幅 1.77 m、径間 2.95m、拱矢 0.73m、環厚 30 cm、高欄が有る一連アーチの石橋である。石工は三浦登。
14	弘法大師像		緒方上井路沿いの弘法大師像。わざわざ井路沿いの家の角に安置し、道中の人目に付くようにしている。
15	弘法大師像		玉乃井旅館そばの弘法大師像。お接待の日には、講の座前の家まで運ばれて、訪問する人々をもてなした。
16	自在社（馬求宮）		文政 5 年（1822）建立。馬求宮、馬求社とも呼ばれ、馬の神である。馬求宮は他の場所にあったが、明治 12 年に自在社に合祀された。自在社の神輿は、緒方盆地の秋祭り「緒方五千石祭」の際に、緒方小学校グラウンド（御仮屋）まで御幸する。
17	自在社（馬求宮）参道石橋		緒方上井路にかかる自在社参道の石橋である。架設年是不明。橋長 3.5m、橋幅 2.16m、径間 2.75 m、拱矢 0.65m、環厚 32 cm、高欄がある 1 連アーチの石橋である。

番号	要素名	写真	説明
18	田植地蔵		鉢ノ久保放水門近くに、周りを空堀に囲まれた中島があり、そこに田植地蔵が安置されていた。地蔵像は、現在は、自在社（馬求宮）に安置されている。広大な緒方盆地地域で唯一の田植地蔵で非常に貴重である。 「田植地蔵尊 助縁村中氏子中天明三癸卯祀 八月吉旦 安座焉 願主 吉良宇吉」の銘文がある。吉良宇吉は下自在村の小庄屋で、村人の合力で安置された。近くには、サンバイマチと呼ばれる田の神様の田があった。
19	深町放水門		緒方下井路の放水門で、緒方下井路に軸丸川が合流する地点に設置されている。降雨時には大量の水が下井路に流入するので、合流地点に放水門を設置し、不要な水を緒方川に放水する仕組みである。
20	鉢ノ久保放水門		緒方下井路の放水門。原尻の滝上の下井路取水堰の水が、深町放水門で軸丸川の水と合流する。大量の水が下井路に流入するので、緒方川に近い場所に放水門を設置したと考えられる。
21	緒方橋		緒方村と南緒方村を結ぶ2連のアーチ式石橋で、明治44年に竣工。橋長46m、橋幅4m、径間27.7mと6.9m。緒方川に架かる石橋では最も古い。緒方橋之碑によると、「緒方・南緒方・合川村は緒方郷の中部にあり、県南有数の米産地で、鉱物・木材・椎茸などの産物も夥しいが、緒方川が深くまともな橋がない。そこで三村が合同で堅固壮麗な石橋を架橋した」とある。

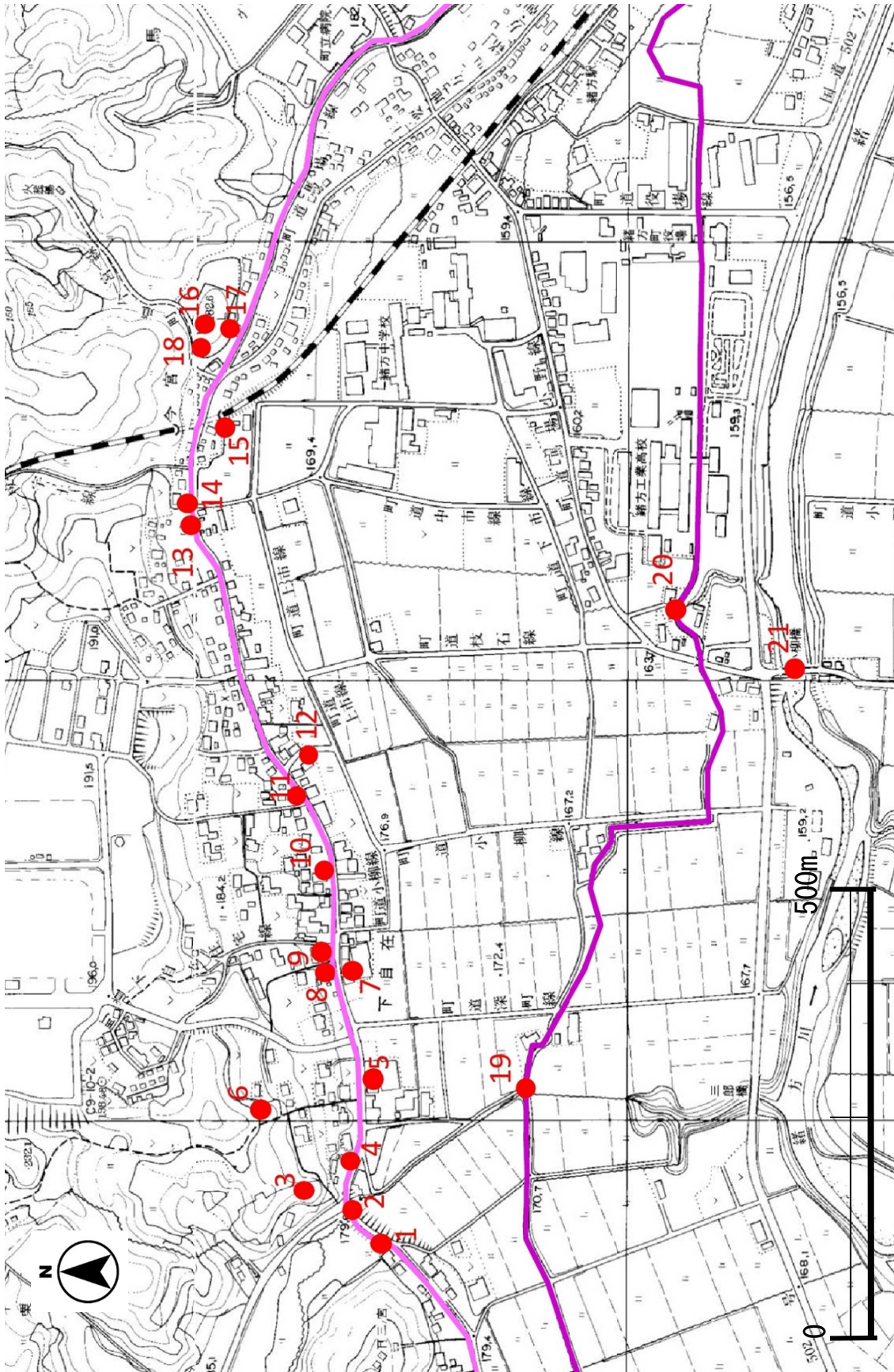


図 48 下自在地域の構成要素位置図